
ハロー、眠り姫

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロー、眠り姫

【Zコード】

Z3208I

【作者名】

久芳

【あらすじ】

とある一国の王女・アンジェは、ある日突然自分以外の国の人々が眠りに落ちてしまった。それから一年、静まり返った国に、ロイという魔術師がやってくる。彼は國中を眠らせる奇病の原因をつきとめ、アンジェとともに解決へと導こうとする……。

ハロー、ハロー。

わたしの声が聞こえますか？

今日も良いお天気ですね。

こちらは何事も変わりありません。

お城のみんなも元気です。

城下町も平和な日々が続いています。

みんなみんな、眠っています。

国は今日も静かです。

ハロー、ハロー。

わたしの声が聞こえますか？

空の彼方に呼びかけるのをやめて、アンジェはそっと、ため息をついた。

城下町から国境の果てまでを見渡せる城の塔は、のぼるといつも風に髪をさらわれてしまつ。豊かにうねる黒髪を耳にかけながら、アンジェはぼんやりと、静まりかえつた国を見下ろしていた。

この国に眠り病が広がつて、一年がたとしていた。

アンジェが十七になる誕生日の朝。目を覚ますと、自分以外の人たちがすべて、深い眠りに落ちてしまつていた。

両親である国王も王妃も、寝室で仲睦まじく寄り添いながら静か

な寝息をたてていた。朝早く仕事をする厨房の人たちは、それぞれ手に包丁や野菜を握つたまま床に眠り落ちていた。夜通し城を見張る衛兵たちは、立つたまま頭を垂れて眠つていた。

城の中をくまなく探しても、起きている者はアンジェ以外にいなかつた。そしてそれは城だけのことではなく、この国の人々までもが、同じように深い深い眠りの底に落ちてしまつていた。

どんなに声をかけても、大きな音を鳴らしても、身体を揺らしても水をかけても、一度眠つてしまつた者は決して起きることがなかつた。命が尽きたわけではなく、ただ静かな寝息をたてるだけ。飲まず食わずで日々と眠り続けているというのに、不思議と命を落とす者は誰一人としていなかつた。

眠り病の噂を聞きつけた近隣の国の医師たちがかけつけても、みな原因を解明する以前に、国に足を踏み入れるなりころんと眠つてしまつのだつた。そしてそのまま目覚めることなく、今もこの国のでこかで、規則正しい寝息をたてているに違いない。

手薄になつた国を狙う賊が入つてきたとしても、それもまた医師たちと同じように、睡魔に襲われて眠つてしまつ。アンジェのいる城にまでたどり着ける者は、誰もいなかつた。

からうじて眠りから逃れて国を出た人々の口から、この国の話はすぐに広がつた。だからはじめの三月ほどは、国を心配してひつきりなしに人が訪れていたけれど、今となつては病がうつると近寄る者もいない。小さな国々が集まる中で、ただ一国だけ陸の孤島になつてしまつていた。

アンジェはひとり、城に残され、再びこの国が目覚めるのを待ち続けていた。

毎朝の日課は、城の塔にのぼり、日を凝らして城下を誰か歩いていないか探すこと。そして、誰かの耳に届くよつたと、塔の上から呼びかけること。

みんな、そろそろ起きませんか？

そう呼びかけ続けるうちに、すぎた日々は気が遠くなるほどに長

かつた。

「 こんなにちは、アンジエ姫」

そんなアンジエのもとに、病を治せるという魔術師が現れたのは、つい最近のことだった。

ロイ、と名乗った魔術師は、アンジエとさほど年の変わらない、精悍な顔つきをした二十歳前後の青年だった。

「あいかわらず、今日も、この国は静かだね」

「起きてるのは、わたしとロイだけよ」

普段は吟遊詩人として諸国を漫遊している彼は、風の噂にこの国を知り、好奇心で立ち寄つてることにしたらしい。自分は眠り病にかかること気につき、國の中を散策しているうちに、かすかに聞こえてくるアンジエの声に呼ばれて出会つたのだった。

「さつと歩いてみたけど、やっぱりみんな、すやすや寝てたわ。よくまあ、飲まず食わずで一年も眠れるもんだよな」

砂漠の砂のような黄土色のローブに身を包み、背中に古びたギターをかけた姿で、『この國を助けにきた』と言われても、アンジエははじめ、素直に信じることができなかつた。

今まで手の施しようのなかつた奇病を、こんな若い魔術師に治せるわけがない。いずれ彼も眠つてしまい、城に来なくなるだろうと思つていたのに。ロイは隣国に滞在を決め、毎日アンジエのもとを訪れてくれるようになつた。

一年ぶりにできた話し相手に、アンジェはすぐに心を開いた。この国では珍しい赤毛と、すこし切れ上がつたまなじりが鋭い印象を与えるけれど、アンジェと同じ瑠璃色の瞳は深い優しさをひめた。

「やっぱじこの眠り病は、伝染病じゃなくて、誰かがかけた魔法なんだ」

それが、彼が国を調べた見解だつた。

「伝染病だつたらもうとっくに隣国にも広がつてゐるはずだし、一年も寝てたら普通、みんな死んでしまうはずだ。一人だけ起きてるアンジェのことといい、これは魔術が強く関係してるんだと思つ」ロイとはいつも、アンジェの部屋で話をした。彼は部屋のバルコニーから国を眺めるのが好きで、アンジェは自分のベッドに腰掛けてその背中を見ていた。紅茶もケーキも必要なく、誰かと一緒にいるという時間がとても貴重だつた。

アンジェはロイに、すべてを話した。病が広がり國中が眠つてしまつたことから、ひとり取り残されたアンジェが毎日どんなことをしていたかもすべて話した。みんなが眠つているのをいいことに、高価なドレスを着て遊んだことも、毎日好きなお菓子ばかり食べていたことも、うつかり國宝の壺を割つてしまつたことも、全部ぜんぶ話した。話し相手がいない間にたまつっていた言葉を、ロイにすべてぶつけているようなものだつた。

彼はそれに嫌そうなそぶりを見せることもなく、アンジェの声を無視することもなく、いつも耳を傾けてくれていた。そして城に閉じこもつているアンジェに、自分が今まで旅して歩いた諸国のことと面白おかしく語つてくれたりもした。

「アンジェは、あいかわらず変わりなく？」
「ええ、まったく変わりないわ」

「なんか、顔色がまた悪くなつたもんな」

あの誕生日以降、国の時の流れは止まつてしまつたようだつた。手入れをする者がいなくとも城は荒れることがなく、厨房の食材が腐敗することもなかつた。アンジエもさほど空腹を感じることがなく、髪や爪が伸びることもない。自分の中を流れる時までもが、とまつてしまつているようだつた。

そしてなにより、アンジエは眠ることができなくなつてしまつた。日が沈んで夜空に星が出ようとも、どんなにベッドの中でうずくまうとも、睡魔が襲つてくることはまつたくなく。何日も悶々と夜を過ぐる、一月たつたところであきらめた。布団の中にはもう長いこと入つていない。

「童話の眠り姫なら、わたしもみんなと一緒に眠れるはずなのにね。そして王子様がキスをして起こしてくれること、肝心の姫様がこれじゃあ魔法なんて解けないわ」

足をばたつかせながら唇をとがりせるアンジエ、ロイは肩をすくめる。バルコニーから部屋に戻つてきたかと懇うと、おもむろにローブの中からクッキーを取り出して、アンジエの口に無理やりねじこんだ。

「俺もまあ、眠り病の国つていつから、てっきり眠り姫を想像して来たんだけどな」

粉砂糖をふりかけたクッキーは口の中でぼろぼろと崩れて、甘さに自然とアンジエの目もどがやわらかくなる。その表情を見て安堵したようで、ロイはアンジエの隣に腰掛けた。

「眠れなくて、辛くないか？」

「……身体は平気なんだけど、ね」

眠れずに夜を迎えると、えんえんと同じことばかりを考えて過ごしてしまつ。流れ星を数えて過ごした夜もあれば、両親の寝室に行つて、その穏やかな寝顔を見ながら涙したことが何度もあつた。眠れなくて一番辛いのは、身体ではなく、心だった。

「俺が来るまでの間、なにしてたんだ？」

「はじめは、城や国の中を歩いて回ったけど……誰も起きてないって気がしてからせ、ずっと城の中にいるわ」

一 日 中 ぼーっと 空を眺めているときもあれば、衝動的に城を磨きあげたこともあった。書庫の本を読みふけって時間をつぶし、それに飽きたら城で眠る人たちの寝顔をひとりひとり見てまわったりもした。

姫らしくしなさいといつた侍女たちも眠りこけてしまっているので、ロイが来るようになるまでは自分の身なりですらどうでもよくなっていた。こうして彼と会つようになつて、久しぶりにドレスに袖を通したのだ。

「はやく魔法をとかないと、アンジューの身体がもたないな……」
しみじみといった様子で呟いたロイに、アンジューはベッドの上で膝を抱えた。

「……でも、わたしね。この病が広がってすこしほつとしてるの」
自分を救おうとしてくれている人の前で、何を言つてしまつなのか。わかっているけれど、一度口が開くと言葉がとめどなくあふれる。ロイはすべてを話してしまいたくなるような、不思議な空気を身にまとっていた。

「この国が眠っている間は、他の国の人たちが来ることもないでしょう？ 賊が入ってきてもみんな一緒に眠っちゃうし、お父様を殺して国を奪おうって思つてる人も、やっぱり国に入るとぱたつと寝ちゃうのよ。このままみんな眠り続ければ、この国は安全なんだろうなって、たまに思つたりするの」

「アンジェ……」

「わたしにね、縁談の話があつたの」

初耳だつたようで、ロイは片眉をあげた。

「この国は、とても小さいでしょ？だから、領土を広げようとする周りの国に狙われてたの。それで、隣の国の王様が、自分の息子とわたしが結婚して、同盟を組みませんかって、声をかけてきたのよ」

それは事実上、国を吸収しようとする動きだつた。もちろんそんなことをしたくないとと思うのが城の中の考え方だけど、城下の民は大人しく隣国と手を組んだほうが安全だと思つていた。アンジェの他に跡継ぎもない王族の血は簡単に途絶えてしまう危険があり、そしてなにより、もろくもあつたからだ。

縁談を断れば、隣の国は力ずくで国を奪おうとしてくるに違いない。アンジェの動きで、この小さな国のですべての人たちの生活が変わつてくる。それを思うと、うかつに口を開くこともできなかつた。

「だから、眠り病で国が混乱したとき、ちょっとほつとしたの。ああ、自分は結婚しないでいいんだって、嬉しかつたのよね」

眠る民の心配よりも、自分のことを考えてしまつた一国のお姫様。軽蔑されただろうかとおずおずと視線をやると、ロイは怒りもあきれもせず、ただまつてアンジェの話に耳を傾けてくれていた。

「……でも、アンジェは、ひとりだとさびしいんだろ？」

それにアンジェは、こくりとうなずいた。

「さびしいわ。でも、国が元に戻るのはやつぱりこわいの」

國中にかけられた魔術が解けたとき。眠りに落ちている人々が目覚めたとき。止まっていた國の時間は再び動き出して、領土を狙われる問題がまた浮上して、民のために手を尽くさなければならないあの日々が戻つてくる。

「そつかあ……」

抱えた膝に額をつづめるアンジェの肩を、ロイがそつと包み込んだ。

「だからアンジェは、この國に魔法をかけてしまったんだな」

「わたし、魔術なんて使えないわ」

思いもよらないロイの言葉に、アンジェはすぐさま否定した。

「使えないわ。わたしに、魔力なんてないもの！」

「……人は、さ。みんな生まれながらに魔力をもつてているもんなんだよ。たいていの人はそれに気づかずに一生を終えてしまうけど、なにかの拍子に魔力が目覚める人はけつこう多いんだ」

ベッドに両手をうずめて、ロイは仰ぐように身体をそらした。彼は生まれながらに、魔力が開花していた子供だったらしい。だから魔術を使うことに何の苦も感じることなく今までやつてきた。けれど一方では、どんなに修行に励み魔力を望んでも、結局死ぬまで開花しなかつた人が大勢いるとも教えてくれた。

「なにか強烈なきつかけみたいなものがあるとさ、人間は本能的に自分を守ろうとして魔力が目覚めるんだよ。アンジェもきっと、なにか理由があつて國に魔法をかけてしまったんだろうけど……そのかけかたがまずい」

「まずい？」

にわがには信じられないことを語つて、ロイはさらに追い討ちをかけてくる。身構えるアンジェに手を伸ばし、彼はそっと、アンジエの耳元に触れた。

「このままだとアンジェは、眠れないまま身体が衰弱していつて、いずれ死んでしまうと思う」

落ち窪んだ眼窩をいたわるように、ロイは目のふちを指で撫でる。「大きな魔法を使うと、それ相応の反動がかえってくるんだ。干ばつを嘆いて雨乞いをすると、そのまわりの土地で雨が降らなくなってしまうみたいにさ。アンジェは国中を眠らせる魔法の反動で、自分の睡眠を抑えてしまったんだよ」

「でも、別にわたし、眠れなくても大丈夫よ？　お腹だつてすかないし、身体だつて別にそんな……」

「アンジェがそう思つてるだけで、身体は確實に衰弱してるんだ」

ふいに、ロイのまなざしが鋭くなつた。

「いいか、アンジェ。国にかけられた魔法を解くことは俺にもできるけど、かけた本人が解くのが一番安全なんだ。だからこの国の魔法を解くのは、アンジェ自身なんだよ。わかるだろ?」

「でも……」

アンジェがかけたんだと言われても、本人にまったく自覚がないんだから解き方もわからない。解くことができると自分で言つてゐるんだから、ロイが解いてくれればいいものを。

「俺が魔法を解いても、國中のみんなが助かるかはわからないんだ」すべての民が助かるとはかぎらない。魔法が解けないままの人もいれば、命を落としてしまう人だつてでてしまうかもしない。

自分がかけしまつた魔法のせいで、民にたくさんの死者が出てしまつたら。今までアンジェたちに豊かな生活を与えてくれたのは、他でもない國民のおかげだつた。自分たちはそれに報いるべく、豊かな國をつくつていかなければならぬのに。

自分の手で、それをうばつてしまふわけにはいかない。

「でも、わたし、解き方なんてわからないもの。魔法を使った覚えなんてないし、解けつて言われても、全然、わからないし……」

「大丈夫。この魔法はきっと、アンジェが眠れば解けるはずだから」さきほどの鋭い表情を消して、ロイがふいに明るい笑顔を見せた。「國の時間をとめるために國のみんなを眠らせた。そして自分は眠れなくなつてしまつた。みんなが眠つている間にアンジェが眠れないのなら、アンジェが眠つてしまえばみんなは起きてくれるはずだ」

「……そなことでいいの?」

魔法といつたら、なにか呪文を唱えることを想像してしまつ。ただ自分が眠ることで魔法が解けるだなんて、嘘にしか聞こえない。

「魔法つていうのはさ、そんなにたいそうじやないんだよ。

魔力の高い赤ん坊なんて、お腹がすいたなと思つたら目の前にミル

クが出てくるし。怪我をして痛いと思つたらすぐに自分で治しちゃうし。そういう本能的なもののほうが強くて、呪文なんて本当はあまり必要ないんだ」

だからさ、ほら。ロイがベッドを叩いて田配せする。アンジエがためらつて腰掛けたままでいると、彼は苦笑して、肩に毛布をかけてくれた。

「子守唄でもうたう？」

「……ううん、いい」

突然眠れと言われても、今まで眠れなかつたのだから簡単に眠れるわけがない。毛布の前をかきあわせて、アンジエはうつむいた。

「……眠れば、魔法が解けるのね？」

「そう」

「みんなが起きたら、また国の時間が動き出すのよね？」

「そう」

「……」

「……アンジエ？」

顔を覗き込むうとするロイから、アンジエは離れた。

「どうした？」

なおも様子をうかがつてくるロイが、肩をつかもつと手を伸ばしてくる。アンジエはそれを避けて、ベッドの上に倒れこんだ。

「アンジエ……？」

どんなに逃げても、ロイはアンジエを気にして近づいてくる。覆いかぶさるようにのぞきこまれて、よつやく彼を見るとその瞳がとても近くにあつた。

「……こわいの」

「こわい？」

「国が元に戻るのが、こわいのよ」

言つと、涙があふれてくる。それを見られたくなくて、アンジエは布団に顔をうずめた。

「ひとりは寂しいわ。ずっとひとりでいるなんて嫌よ。でも、それ

以上に、あの生活に戻るがこわいのよ……」

声が布団の中でぐぐもつて、あふれる涙が吸い取られてゆく。毛布を強く握りしめ、アンジェは漏れそうになる嗚咽をこらえた。
「わたし以外に世継ぎがいなってことは、いずれこの国をわたしがおさめるようになるつてことだもの。それが嫌で、わたし、ずっと、眠り姫になりたいと思つてた……」

幼いころ読んだ、童話の眠り姫。魔女に呪いをかけられたお姫様は、十五の誕生日に糸巻きのつむに指をさし、深い眠りについてしまう。城中の人々もともに眠りにつき、百年の年月を、呪いを解いてくれる王子様が来るのを待ち続ける。

そんな童話に幼いころから憧れていた。

アンジェは生まれたとき、誰にも呪いをかけられなかつた。十五の誕生日に糸巻きのつむに指をさしてみても、血が流れるだけで眠気など襲つてこなかつた。

アンジェの元に、王子様は来ない。アンジェを愛して、この国を一緒におさめてくれる王子様なんて、来るわけがない。眠った唇に口付けをしてくれる愛しい人なんて、あらわれたりしない。

アンジェは国のために、好きでもない隣国の王子と結婚しなければならない。この両の肩には重すぎる、民の命をあずかっていかなければならぬ。

幼いころ夢見ていた自分と、今の自分はとても違う。

「眠りたくなんてないわ！ 魔法なんて解けなければいいのよ！」

アンジェは、声をあげて泣いた。

現実を見なけばいけないのはわかつっていた。国を救わなければならぬのもわかつっていた。けれどどうしても、夢を捨てられなかつた。

眠り姫に憧れて。憧れてあこがれて。いざ国が眠りに落ちても、アンジェだけは眠れなかつた。眠り姫になれるなら、自分が真つ先に眠れたはずなのに、目が冴えて眠気などまったく感じなかつた。

「誰も、わたしの声なんて聞いてくれないもの！」

国に、自分のほかに姫がいるわけでもなく。王子様が迎えに来てくれるわけでもなく。田舎めの口付けをしてくれる人は決して現れず。

途方にくれてすゞした一年はとても長かつた。

ひとりですゞすのはとてもさびしい。

けれど、国が元に戻るのはとてもこわい。

「……泣いていいよ、アンジェ」

背を向けて泣きじやくるアンジェを、ロイがそつと、抱き寄せた。

「今までそうやって、誰にも言えずにためこんでたんだよな。だから、泣いていいよ」

泣き顔を見られたくないアンジェをわかつて、ロイは背中からそ

つと、包み込むように腕をまわしてくれる。その広い胸があたたかくて、アンジェはまた、涙がこぼれた。

「そつかそつか。だからアンジェは、国に魔法をかけちゃったんだな」

「……かけるつもりなんてなかつたもの」

「わかつてゐる。ひとりで悩んで、考えて、押しつぶされそうになつて。自分を守るうとしたアンジェの心の奥底が、本能的に魔法をかけちゃつたんだよな」

わがままを言つ子供をあやすよに、ロイが甘い口調で語りかけてくる。それがまた、乾ききつていたアンジェの心に染み渡り、涙をあふれさせた。

「俺はしがない魔術師だからたいそうな」とは言えないけど、国民の命を背負つてことは、やつぱりすゞぐ、精神的に重くなるんだと思うよ。アンジェの年で、もつそういうことを考えないといけなくなつたなら、どこかで反発する心があつて当然なんだ」

「でも、わたしは……」

アンジェは、逃げたのだ。姫の責任が怖くなつて、逃げてしまつた。国の時をとめてまで、自分の前につきつけられた現実から逃げようとしていた。

国を出て、民を救う方法を探そうともしなかつた。ただ、自分の殻にこもつていた。

「わたしに、国なんて無理だよ……」

もう、なににたいして泣いているのかもよくわからなくなつていた。一人でいるときもよく泣いていたはずなのに、ロイに抱かれて泣くのはそれとは全然違つていて。流した涙でぽつかりとあいた心はいつも虚ろだつたはずなのに、今は彼の優しさが、甘いミルクのようになにか身体の中に染みわたつてゆく。

「大丈夫だよ、アンジェ。アンジェはきっと、ひとりで抱え込みますよ」

ロイの声がとても心地よい。

「「」の眠り病の一件で、他の国もまた違う動きを見せ始めたんだよ。」のすきに領土を奪おうとして動くんじゃなくて、眠り続けるみんなの心配をしてるんだ。優秀な魔術師を集めてなんとか国に踏み込めないかつて、隣の国がすぐ心配してるよ」

その穏やかな声色に、あふれる涙もすこしずつおちついてくる。けれどアンジェはロイの腕が心地よくて、すすり泣きをいつまでも続け、あたたかさに身をゆだねていた。

「アンジェは今、大人になろうとしてるんだ。このままずっと夢見ていいけど、現実もあるって、わかつてるんだよ」

「でもわたし、逃げてるもの……」

「悩んで、悩んで、魔法をかけるぐらい思いつめていたってことは、それだけアンジェが真剣に考えていたってことだよ。ただ単に逃げようとしていたら、自分に魔法なんてかけたりしない」

だから、だいじょうぶ。泣き腫らしたまぶたを開くと、ロイの唇が微笑みながら動いていた。よつやく顔をあげたアンジェに彼はほつと息をつき、抱きしめていた身体を離した。

涙でまぶたが赤くなり、瞳もとろんと熱っぽくなっている。くすんくすんと子供のように甘えるアンジェの頬を、ロイがそっと手のひらで撫でた。

「……ちなみに、縁談の話もさ。アンジエからはつきり嫌だつて言って、ほかの交友関係の結び方を提案してもいいんじゃないかな？」
「わたしに、そんなことができるの？」

「それはアンジエ次第だけさ。やううと思えば、アンジエにはできるさ。なんてつたつて、これだけ大きな魔法を使えるぐらいの力を持つてるんだしな」

励ましているのかそれともけなしているのか。受け取りきれなくて眉をひそめるアンジエに、ロイは肩をすくめて笑った。

「もう、こわくないか？」

「……まだ、こわい」

魔法をかけたのが自分の仕業なら、それを解いて現実に戻らなければならぬ。わかつているのだけど、あともうすこしの勇気が出ない。

まだ逃げてみたい。あともうすこしだけ、逃げてみたい。

「でも、戻らないといけないのよね……」

「無理して戻ると、きっとまた魔法をかけるだらうから。無理はないほうがいい」

無理やりに魔法を解こうとしないで、アンジエの様子をうかがいながらゆっくりとうながしてくれる。だからアンジエはつい、ロイに甘えてしまう。もつと厳しく言つてくれればと思うけれど、これは自主的に動かないといけないこと。甘えてばかりいられなかつた。

「……ロイ」

田じりに残る涙を布団にぬぐつて、アンジエは優しい魔法使いを見上げた。

涙を吸つたまぶたが、重くなり始めていた。

「わたしが眠つて、目が覚めたら、ほんとうに国はもとに戻つていいのね？」

「戻つてゐよ。約束する」

「わたし……怒られたりしない?」

おそるおそるといつたアンジエの口調に、ロイが破顔した。

「しないよ、絶対」

くすくすと笑つて、彼はアンジエの頬を撫で続ける。それが心地よくて、アンジエはゆつたとまばたきをした。

「目が覚めたら、ロイはいなくなつてる?」

「ちゃんとそばにいるから大丈夫」

それでも不安そうな顔をするアンジエに、ロイはすこし考えてから、指先をアンジエのあご先にのばす。アンジエがまぶたを伏せると、彼の動く衣擦れが聞こえた。

唇に、ロイの口づけを感じる。

「おやすみ、アンジエ」

その余韻が消えぬうちに、アンジエの意識がすつと遠ざかっていつた。

「アンジエ様!」

アンジエが目を覚ますと、城の中は大騒ぎになつていた。てつくり一年も眠つていたことにみんな混乱しているのだろうと思つたけど、どうやらそういうわけでもないらしい。眠る前は誰もいなはずだつたベッドの周りをたくさんの人々に囲まれて、王妃は娘が身体を起こすなり、涙を流しながら強く抱きしめてくれた。

アンジエが起きたと知らせを受けたのか、国王までもがあわただしく部屋にはいつてくる。みんなも目が覚めたばかりで忙しいはずなのに、普段は物静かな父までもが娘の起床を涙ながらに喜んでいた。

起き抜けのその騒がしさに、アンジエはただただ、呆然とするしかなかつた。そしてひととおりの騒ぎが落ち着き、両親がアンジエ

のもとを去つたじりに、ようやく事態を飲み込むよつになつていた。

まだかすみの残る頭で、アンジエはロイの顔を見る。約束どおり、彼は目が覚めても、ベッドの傍らでずっとアンジエを見守つていてくれた。

「……どうして、本当のことを言つてくれなかつたの？」

国のみんなが眠つていたわけではない。

眠つていたのはアンジエ自身。あれはアンジエがかけた、魔法の中の世界だった。

「アンジエ自身が、魔法をかけたことに変わりはなかつただろ？」

ロイはアンジエを目覚めさせるために、あの魔法の中に入り込んできたのだった。

田覚めの仕度でばたつく侍女たちを眺めながら、ロイはそのままをみはからい、唇をアンジエの耳元に寄せた。

「おはよ、眠り姫」

間近にある瑠璃色の瞳がなんだか照れくさくて、アンジエとロイは、くすりと笑いあつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208i/>

ハロー、眠り姫

2010年10月8日15時26分発行